

国際会議出席報告
—2012 年前期若手研究者海外学会出席助成—
第 8 回国際根研究学会シンポジウムに出席して

出口哲久

(北海道大学大学院農学院)

このたび2012年6月26～29日にDundee (イギリス・スコットランド) で開催された第8回国際根研究学会シンポジウム (8th symposium of the international society of root research) に出席した。本会は植物の根に関する研究全般を幅広くあつかったもので、39カ国から318名が参加した。日本からの出席者は30名と多く、根の研究において重要なポジションを占めていることを実感した。

講演の内容は養水分吸収、根からの浸出物、根圏微生物、根についての調査手法の確立など多岐にわたり、調査の対象も作物、モデル植物から木本植物まで幅広く扱われていた。とくに根の調査手法については、X線、MRIおよびCTなどを利用して全根系を3次元でモニタリングする技術が次々と報告された。これら手法の用途としては、モデル研究への貢献や少数個体を対象とした詳細な調査が主として考えられた。一方で大規模な表現型解析を目的としてモニタリングが自動化された報告もあり、今後の進展が期待された。このような手法についての講演が多数行われるのは本学会の特色と考えられ、非常に興味深かった。加えて、これら手法間でのコストや測定時間の比較を介して、それぞれがどのような調査に適しているのかを総括するような視点が招待講演者などから提供されれば、より議論の活性化が望めたのではないかと感じた。

ペンシルバニア州立大学の Jonathan P. Lynch 氏の招待講

演ではリン吸収を中心に根系改良に関する多角的なアプローチが紹介され、発表の明快さもあいまって強く印象に残った。とくに根の破生通気組織について、酸素の伝達経路としてではなく、根の呼吸や養分の利用コストを合理化するための器官としての重要性が提唱されていたことは興味深かった。ポスターセッションでも同大学の参加者が窒素欠乏下での地上部および根系の生育に破生通気組織の差異が寄与することを示していた。

私は「バレイショの根系に環境要因およびG×E相互作用がおよぼす影響」をテーマにポスター発表を行った。国際学会への慣れもあり、比較的落ち着いて質問に答えることができた。一方で、今回の学会ではバレイショの専門家の参加が少なく、説明に納得してもらえるものの、反論や指摘はほとんど得られなかった。バレイショ特有の議論を扱った私の発表内容は専門性が強く、他作物を扱う研究者への応用性に乏しかったとも考えられ、今後は参加する学会にあわせて発表する内容を吟味する必要があると感じた。

最後に、本会議への出席にあたり日本作物学会より助成を賜り、貴重な体験をする機会を与えていただきました。この場をお借りして日本作物学会に厚く御礼申し上げます。